
誘涙奏想

綉芭葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誘涙奏想

【Nコード】

N1598P

【作者名】

綉芭葵

【あらすじ】

血の繋がらない、兄を想う弟、蛭。

その思いは、どんどん形を変えていく……。

プロローグ 始心

僕には一つ上の兄がいる。

兄さんは優しい。

兄さんはかっこいい。

兄さんは背が高い。

そんな兄さんは僕の事「優しい」って言う。

兄さんは僕の背を小さいって笑う。

兄さんは僕を「蛭」って呼ぶ。

兄さんは僕の名前を呼びながら「大好き」って……。

兄さんが笑ったときに、兄さんが僕の名前を呼ぶたびに、悲しくなるよ、苦しくなるよ、つらくなるよ。

でも……。

兄さんが僕の名前を呼ぶたびに、いとしくなるよ、せつなくなるよ。

こんな事を思う僕は、もういかれちゃってるのかな？

それでも僕は兄さんが好きだから、僕は今日も嘘をついて過す。

兄さんは僕の事「優しい」って言う。

僕は「兄さんも優しい」云う。

兄さんは僕の事を小さいって笑う。

僕は「兄さんが大きい」って？う。

兄さんは僕を「蛭」って呼ぶ。

僕は笑いながら「兄さん」って喚う。

兄さんは僕の名前を呼びながら「大好き」って……。

弟としてでもうれしいよ。

だから僕は「愛してる」って、心の奥で思う。

たとえ叶わなくても。

好きだよ、兄さん。

初心

僕には1つ上の兄さんがいる。

背が高く、頭がよくて、

かっこよくて、そんでもって 優しい僕のたった1人の兄。

ピロロロロ……ピロロロロ……。

「兄さん、朝だよ。」

こついいながら、蛭は薫の部屋のドアを開けると、声をかける。

「遅刻するよ?」

「……今何時?」

薫は眠たそうに目をこすりながらつぶやく。

「まだ、早いんだろ?」

「もう8時だよ?」

蛭はカーテンを開けながら、薫に答える。

「……ごめん、後5分だけ。」

「え?つちよ、兄さん?」

そういつて、蛭が振り向くと、もう薫は眠りに落ちてている。

「……はあ。」

蛭は一瞬あきれた顔で兄を見ると、小さく笑った。

「……仕方ないなあ……。」

……大丈夫、後5分ぐらいなら、寝かせておいても遅刻はしない。
い。

そう考えると蛭は、

「兄さんきっかり5分後に、起こしにくるからね。」

そう薫につぶやいて、部屋を出た。

初心朝

「蛭、走れ！遅刻する！！」

薫はそう叫ぶと、スピードを上げる。

「つちよ、兄さん待ってよ！僕そんなに早く走れない！」

蛭はそう叫びつつも、必死に薫に追いつこうと走る。

「蛭、お前ならいけるはずだ！なにせ、我が校始まって1のバスケット期待の星！……だろ？」

「陸上部主将の兄さんには言われたくないね。」

全力で走りながら後ろを振り向きながらしゃべる薫に、蛭はあきれた様に答える。

「大体、兄さんが起きないから悪いんだ……。」

あらかさまに大きくついたため息は、薫には聞こえない。

「兄さん、兄さん起きて！！」

あれからきつかり5分後。蛭は薫の部屋に戻ってきた。

「兄さん、兄さんつてば！！！」

しかし、何度ゆすつても薫は起きない。

5分、10分……。

さすがにこれだけ起きないともなると、

自分の兄が眠り病にでも罹ったんじゃないかと蛭が心配し始めた頃。

「……先に行つてくれ……。」

薫がぼつんと言った。

「……はあ、わかったよ兄さん。先に行くよ。」

と蛭はにっこり笑う。

「……ほど世界は甘くはない。」

「まったく！兄さんいいかげん起きてつてば！！」

そう言つて、おいてつたら、兄さん1日起きないじゃないか！！

前だつて、学校サボつて……、部活がないからつて甘えすぎ

蛭は自分の腕時計を見ながら兄に聞く、

「…………ざつと、500Mつてとこだな。」

始業まであと2分。

「大丈夫、僕達兄弟なら余裕だよ。」

「だな。」

…………妙に自分たちの足に自信がある2人であった。

「…………ほら、校門だぜ。」

慧が叫び、2人が校門を潜り抜けた瞬間。

キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコー…………。

「ほら、間に合っただろ？」

「ぎりぎりだったけどね。」

激しい息遣いをしながら、2人はそう言つと笑つた。

紹心

「じゃあ、また後でな。」

薫は靴箱で靴を履き替えると、蛭に向かってにっこり笑う。

「うん、またね、兄さん。」

その言葉を聞き終わらないうちに、薫は蛭に手を振ると自分の教室に向かって走っていく。

「……………まったく、あいついくつだよ。」

「はあ」とため息をつくど、

「ほんと、困った兄さんだ。」

そう言つて蛭は首をふる。

しかしあきれたフリをしてはいるが、目が笑っているのはごまかせない。

「……………さて、僕も教室に行くかな。」

最後は結局一人で笑いながら、蛭も自分の教室に向かって歩き出した。

蛭と薫が通う学校は、2人が住む家から徒歩15分。

閑静な住宅街に建っている。

偏差値的にみると一般的、運動が全国レベル! ……という訳でもない。

つまり良くも悪くも「普通」という言葉が似合う公立高校だ。

ちなみに蛭は高校1年生。薫は高校2年生。

2人とも、学校ではそれなりに目立つ兄弟として有名である。

蛭は教室に向かいながら憂鬱だった。

別に1時間目の古文の予習を忘れた事が原因ではない。

(蛭いわく「あんなものなら、予習なんて必要ないよ」「(環境的原因というより、「人為的原因」というのが正しい。

「……………」

蛭はドアに手はかけたものの、微妙に開ける気になれなかった。しかし、世界とは皮肉である。

「蛭くん！おはよう、遅かったね？遅刻ぎりぎりだよ？」

教室にいると思っていた「彼女」は、教室ではなく廊下で蛭を待っていたらしい。

「……………しまった。ためらわずに教室に入ってしまったえばよかった。そうすれば、こいつの顔なんて見ないですんだのに。」

蛭は心の中でこうつぶやいているのだが、この心とは正反対の優しい笑顔で

「でも、間に合ったからいいだろ？優衣ちゃん、おはよう」
そう彼女に告げる。

「くすくす……………でも珍しいね、蛭くんが遅刻しかけるなんて。」
「優衣ちゃん」と蛭に呼ばれた少女は、にこにこしながら問いかける。

「ああ、それは兄さんが」

「？」

蛭は「兄さんがいつまでたっても起きないから……………」と言おうとやめる。

そんなことを言えば、

「お兄さん……………ああ、桐生先輩！」

そういう答えが返ってくることにぐらい、わかっているからだ。

「……………なんでもないよ、ちょっと寝坊したんだ。」

普通なら、何があったのか聞くこうとするだろうが、優衣ちゃんは、
「そうなんだ。」

とだけ言つと、またにつこり笑つて、

「教室入るう？先生来ちゃう。」

そういつてドアを開ける。

茶色っぽいちよつとだけウェーブのかかった黒い髪。

そんなに背の高くない、お人形みたいな少女。

「？蛍くん、どうしたの？」

なのに、蛍は

・・・こんな奴だいつ嫌いだ。

そう思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1598p/>

誘涙奏想

2011年10月8日08時45分発行